

# 社会奉仕の理念

—世界、特にアジア・アフリカの窮乏と難問に直面して—

翻訳するにあたって

去る一九六一年一月、ローマで開かれた第十回国際社会事業会議に出席した折、あの人を圧倒するような会場で聞いた幾つもの演説、討議、報告のうちで、この名講演ほど私を感動させたものはない。英国の産業福祉協会理事長、ジョン・マーシユも「ラジクマリ・アムリ・カウア」の演説は真にすばらしい。これから先何年間も、私どもの多くに靈感を与えることだろう。このような演説を聞く機会を持つためには、何万哩の旅行も喜んでしたいものだ」と述べている。

会議場の雰囲気がそうさせたのであろうが、その内容、その表現、その響きは実に印象深く、私を離れぬものであった。あのスピーチが活字になったものを、もう一度読んで見たいと、心から願っていた。

ところがはからずも、今回、ブラジルのリオ・ダ・ジャネイロで開かれた国際社会事業会議場に設けられた、英国のブースで、そのスピーチが単行本になっていることを知った。早速、その外の本と一緒に注文したが、間もなく郵送されて来た。尚、南米の旅から帰って見ると、一九六一年のローマ会議報告書が漸く手元にとどいていた。その中には矢張り、このスピーチの速記が、私を持っている単行本とは多少異なった形でおさまられている。私の感激を皆様と分かちたいと思い、著者と出版者の許可を得て、それをここに訳出した次第である。

ラジクマリ・アムリ・カウア  
菅 支 那 子 訳

レネー・サンはその一生を人類に捧げきった、真に偉大な人物であった。その全生涯が愛の叙事詩を実行に移したものであった。それ故に、彼を永久に記念するため設立された賞を受ける者は、よろめきながらも、この社会奉仕者中の巨人が示した人生の高い基準に近づいて生活しようと、必ずや努めるに相違ない。自分の限界がわかっていく私には、自分の上にふりかかって来た任務が如何なにもむづかしいものであるかは、十分、理解しているつもりである。しかしながら、この国際社会事業会議の如き国際的機関の善意と祝福を受けていることが私を力づけ、励してくれるので、レネー・サンが私どもの一人一人にさせたいと願うような仕事に、残る短い私の生涯を、尚も捧げるようにさせるのである。

× × ×

人間は常に仲間をもとめる存在であった。孤独で暮すことはその本性に反する。そこからして、おくれていようが、進んでいようが、世界各国到る処に、社会という概念が出現して来た。交りを求める人間

生来の欲求の故に、この概念は家族生活から更に広い社会や国家へとひろがって行った。社会というものはどんなに原始的であろうと、小人数であろうと、その構成員が一致団結し、その義務と責任をよく承知していないならば、栄えることが出来ない。従って社会の繁栄に寄与するような生活様式を展開するのに、行動に関するおきてがはつきりと、つくられねばならなかった。そこで暫くの間、社会秩序の最初の概念に注意を向けるのも、興味あることと思う。文化が何千年も過去に及んでいる国から来ているので、印度人の人生観を皆様の前に展開しよう。勿論、現代の印度において、その通りが実行されているわけではないが、尚、大衆の心を支配しているからである。

雄大な優波尼沙土の一篇に、次のようなことが述べられている。「この地上にあるすべてのものはイスワラ（神）のものである。あなたに与えられたものは、それを樂しむがよい。他人の財貨に貪欲の眼を向けてはならない。この地上で働くのは人間の運命である。これとは別の生き方はない。働くことである。そして如何にながらうと、あなたの人生を切抜けることである。労働が正しく、私心なく行なわれると、魂に執着するような、罪深い残留物は残らない。身体の中にある精神的存在を否定する者は、自殺者に等しい。そのような人間にとって、この世は全き暗黒である。他人の身体の中で自分が生きるように考えられる人は、嫌いとかいやとかの思いで、心を騒がすことをしない。周囲の人間と自分を完全に同一視出来る人は、すべての迷いと悲しみから解放される。あなたの精神が断えず動いてやまぬ大氣と合し、あなたの身体が灰に化す時、あなたの働きのみはあとに残ることを覺

えていて欲しい。この深遠な知識をもって行動して欲しい。おお光輝よ！ 汝はあらゆる道を知っている。私どもを正しい道に進ませて欲しい。おお神よ！ 罪に陥らぬよう、私どもを導き給え。」印度教教典には、実に、他人を助ける指示の言葉がみち溢れている。

タゴールは印度精神について、次のように書いている。「私は印度を愛する。その理由は地理という偶像を求めるためではない。印度という土地に生れるめぐり合わせを持ったためでもない。光明を与えられた偉人の意識に発した、生ける言葉を、荒狂う幾世代もの間も、失わないようにして来たからである。」印度教教典は又、いう。「梵天（神）は真理である。梵天は智慧である。梵天は無限である。平和は梵天の中にあり、善は梵天の中に、万物の統一の中にある。」更に進んでいう。「家長は梵天の中で、その生活を築くべきである。万物の一層、深い真理を追求すべきである。人生のあらゆる営みにおいて、その働きを永遠なる存在に捧げるべきである。かくして印度が真に求めるものは、否定に外ならぬような平和ではなく、機械的適応にあるでもない。そうではなくて、それはシヴァ（神）の中に、即ち完全な結合の真理の中にあるところの善の中に見出さんとしていることを知った。印度はその子供達がカルマ（行動）をやめることを願わず、生存の精神的意義を純粹に知って、永遠的存在の前で自分のカルマを行なうよう、願っていると、知るようになった。そしてこれこそが、母なる印度の真の祈りであると、知るようになった。」「一であり、あらゆる人種的差別を越え、あらゆる有色人種生来の必要をなくし、その始めより終りに至るすべての事物を理解する、その彼に、善の智慧

に外ならぬ、その智慧をもって、私どもを互いに結合させよう。」

実に、精神的な生活が印度の真の特質であった。あらゆる時代を貫いて、大衆の心を最も強く動かしたものは、帝国の建設者でも、戦いの勝利者でも、更には富者でもなかった。その反対に、それは華麗壯観な、物質的富のあふれるこの世を断念したりシス、即ち聖者であった。彼らは自負心と権力、富とこの世の名譽は、人生の精神的価値に比すれば、無に等しいと教えた。偉大な皇帝アソカは戦争の悲劇を知って、戦争を断念したが、これに匹敵するような記録が他の歴史に残っているであろうか。彼の心は慈悲心にみだされていて、征服には最早、何の魅惑も感じなかったのである。

一大叙事詩、マハーバータの中核ともいべきギータから学ぶべき教訓は、毎日の仕事、天職であり、自己の能力の最善を尽して神に奉仕するよう、神によって召された活動範囲だということである。大切なのは、私どものする仕事でなくして、それをする精神である。神を愛してなされたならば、最も低い種類の仕事と云えども、自己の利益のためになされた最もすばらしい仕事よりも、神にとっては上位にあるのである。前者は私どもを自由にするが、後者は私どもを一層強く束縛する。換言すれば、自由は真の奉仕の中に存在するのである。

真理は自己苦難を通してのみ、真理となる。真理のために人間を苦しませ、真理の力を世に証明させよう。そうすれば、自分の自由意志で、真理を確信し、受け入れるようになるだろう。この福音は、私どもの人生観に変化を齎す故に、重大な結果を持つことになる。ガンディが教えたように、殺されることは、殺すよりも一層、英雄的なこと

になる。心得違いをしている兄弟に対して、全く天真らん漫な心で反対して立ち上がり、必要とあらば彼の方に進んで行って彼を殺すよりも、彼に殺される方が一層、高潔である。暴力によって彼を殺してしまふよりは、愛を通して彼を回心させる方がもっとためになる。相手を破滅させ、一時的勝利を得て、悪を永続させるよりも、自分自身が苦しむことによって、相手の心に神の光を呼びさまし、そのことによって悪を永久に除く方が更に結構である。手短かに云えば、愛の王座にある時にのみ、真理は確実であり、義務は間違わない。永遠の真理は量り難い愛を必要条件とするからである。

恐らく、人生全体をつつむ道徳法を最も立派に述べたものは、サン・スクリット語のダルマという言葉の中に見出されよう。ダルマは法則と考へられているが、一地方とか一社会、一国家などの法則のことをさすのではない。これは宇宙全体との完全な調和の中に、そのあらゆる微分子をも支えて行く原理を認め、それを基盤とした言葉である。

アダルマ——法則の破棄——は訓練を欠き、利己的だという意味であり、従ってこの結果として、不平、不健康な競争、恐怖とか不信などの諸悪が生ずる。私どもは宇宙は一つの家族であり、一団をなすものであること、そこで暮すものはこの法則をはっきり知っていようといまいと、兎に角、その法則によって生きる以外には、何も出来ないことを知ねばならぬ。この法則にそむくものは何であっても、その有機的全体の内部で、分裂と衝突をひき起すに違いない。

印度教の聖典の中で定められている人生四つのアシニラマー、即ち四部門は人生を統整するためのものと考えられていた。この四部門は、

今日の世界においても、人々の注意を引く、否、引かねばならぬものである。先ず第一部門は、ブラマーマチャリヤ即ち博學で道徳的に完全な教師の足下で、勉強する学徒の見習いの生活であつて、芸術や科学、宗教上の伝承に関する教育を受けて、厳格な独身生活をおくる。

第二部門はグリハスタで、一家を構えた家長が自分のグル、即ち教師から吸収したことを実践する家庭人の生活のことである。若し彼が真に訓練されていれば、この家長の生活には、自分の高い理想と自分の社会的義務と個人的欲求の間に、ある調和が存在することを意味している。第三部門はバナブラスターであつて、これは地上における人生最後の行程への準備段階である。第一部門が第二部門を準備したように、第三部門は最後の部門を準備する。この世との接触は次第にうすれて、宗教的礼拝や瞑想により多くの時が与えられる。これは人間がこの世の心配事や煩悶から解脱しようとする期間である。最後にサンヤサの部門は人生の物質的諸価値を断念することを意味する。それによって、人間には人生究極の目的、即ちモクシャ(救い)に達する道を知ることが約束される。

やがて、紀元前六世紀の頃には、仏教の光は印度のみならず、東洋全体に行き渡るわけである。ある意味で、仏陀は自分の生れた国では余り受け入れられず、中国、日本、ビルマ、セイロン、タイ、インドネシアで受け入れられたということは、奇妙なことである。これは主として、仏陀が新しい宗教を打ち立てるよりも寧ろ印度教を改革することに力を注いだからであつた。同じような気持で、彼はあらゆる種類の悪を遠ざけ、善業を積んで、心を清めよと教えた。彼もまたカルマ

(行動)が人生全体を支配すると考えた。全宇宙がそのカルマによって縛られているところから、業は走っている戦車の車輪の軸に比すことが出来る。仏教の主張するところによれば、個人が万物の眞の性質を理解すれば、この世の生活を放棄しようとする努力するようになる。この世の生活には何も、本質的なものが見出されないからである。眞の仏教徒は八正道、即ち貴い八つの道に則つて、自分の生活を作り上げて行く。その八正道とは、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である。最大の愛と最大の憐みとが仏教の基調をなしている。眞の信奉者はこの世のあらゆる生き物に善と幸福を齎し、彼らが苦しまぬように努めなければならぬ。

仏陀と同時代の人物として、中国には老子と孟子、イランにはツアラトーストラがいた。約一世紀おくれて、世界はギリシャの大哲学者達によって啓発された。ソクラテスは眞理への追求を断念するよりも、寧ろ自ら進んで自分の生命を棄てた。彼のすばらしい弁明の中で、こう述べている。「個人は不正な仕方、罪に定められることがあるかも知れない。そういう場合は、法律が誤っているか、法律が誤って施行されたか、その何れかである。それでも個人は事件を自分の手で処理することは出来ない。人間が作っているあらゆる社会の一員、従つて国家の一員は自分の属する社会全体に、多かれ少なかれその個人の意志を犠牲にしなければならぬ。人は社会の規則又は法律に従わねばならぬ。さもないと、その社会は亡びてしまう。」このようにして、公民権という概念が生じた。プラトンは善き生活を強調したし、アリストテレスは国家を、人間がその善を実現するための最高の社会だ、



と見做した。歐洲の公民学或は公民権の哲学は、ギリシャとローマの伝統の上に基礎づけられている。西欧諸国では、いろいろの国民の氣質や性格や必要に応じて、つくり上げられたのである。その後、キリスト教の輝かしい光によって、その内容が大いに豊かになったことはいうまでもない。手仕事を尊いものとする理想は、ベネディクトンやその他の修道院の修道士達によって受け入れられた。聖賢の理想は、労働の尊厳とともに、西欧の優れた修道会によって人々に教えられた。フランススコ修道士達は、修道院の隠れ場所を出て、世間の人々の間で、「貧しい人々の小さき兄弟」として生活した。兄弟愛と相互奉仕という理想は、中世期のいろいろなギルドの力と生命であった。それは労働者達を団結させ、自分達の技術の優秀さに対して、立派な誇りを感じさせた。それは製作品を安価で売ったり、不当な競争を取り除いた。貧しい人々に対する正義と憐憫との理想は、教会のなした真剣な努力の根柢に横わっていた。即ち教会は高利貸を非難し、商人の間で正当な価格が定められることを主張して、あらゆる商売を道徳的にしようとした。私どもは兄弟愛と人間の自由と知識のために、偉大な冒険をした人々が網羅した領域を、誇りをもってふりかえることが出来る。こういう理想を実際に広めることは、新しい世界に向って大きい一步をふみ出すことであった。アレキサンドリアのクレメンスは言った。「富は、それが正當に取縮られないならば、全く悪の要塞である。私どもが所有するすべてのものは、用いるために与えられている。……誰にも与えることをしない人は、一層、貧しくなる。与えられる人でなくて、与える人が真に富んでいる。救いのけわしい坂をよじの

ぼる人は、自分の手に喜捨というきれいな杖を持っていなければならぬ」と。印度教の教えもまたこういう意味のことを述べている。人は自分の家族のために自分を犠牲にし、自分の家族を自分の村のために、自分の村を自分の国のために、そして又、此の世を自分の魂のために捧げねばならぬ。こういう考えは、魂の精神的救済ということに最高の優先権が与えられているので、恐らく政治的であるよりも社会的であり、人道主義的であり、又、精神的である。しかし、東洋の考え方と西洋の考え方との間の接点は数多くある。何故ならば、最大多数の幸福と福祉をつくり出すのに役立つような、生活の仕方が常に強張されているからである。回教は人間の兄弟愛を非常に力説した。イエス・キリストが最高の犠牲を払ったのは、人間が生き得んためであった。山上の垂訓の教えは一つの傑作であって、どんな宗教の信者も、これに対して異議を申立てはしないし、又、世界歴史のどの時代も、今日程、神を恐れ、自分達の隣人を自分自身の如く愛することを、必要とする時はない。

若しすべての宗教が、人類には全体の福祉に貢献するように生活する義務がある、と主張する点を認めるならば、その結果として、善き公民であることについての学問は、地方的関心から国家的、国際的及び人間らしい関係へとひろがって行かねばならぬ。若し人類は一つ家族であり、唯一の神の子供であることを信じるならば、この信仰が私どもの生活の中に滲透すればする程、益々、同胞のことに無関心ではあり得なくなるであろう。喧嘩、分裂、衝突、競争は憎むべきものとなり、平和建設者となる義務が、私どもの上にふりかかって来るので

ある。

現代は科学的時代だということになっている。私どものある者の視界内で、最近、六十年間に、科学と技術は非常に発達した。病気に關する細菌説の確立、放射能の発見、岩石に關する年代の知識、いろいろな星の距離の測定、抗生物質の発見、原子の分裂と、その驚くべき業績から起るすべてのこと、宇宙旅行等々、そして一日一日と、どのような驚くべき発見が待ち受けているかもわからないのである。この驚異の時代に、人類のために働く私どもは、すべての知識が單に物質的富をつくり上げ、富のみを進歩と見做さぬように用いられるよう、大いに氣をつけていなければならぬ。生産の総額や富の増加は、手段を無視して、目的とされるべきものではない。国民的性格の向上こそ、何よりも最も大切な目的でなければならぬ。同時に、フッカーもいうように、「人々はよい生活をする前に、生存のための備えを十分に、持っていなければならぬ。」従って、私どもは物質的な暮らしの事情が個人の生活を決定することを知っているべきである。社会奉仕者達は、健康な身体活動を阻止するような事情が個人からばかりでなく、いろいろな階層からも除かれなければ、甘んずることは出来ない。しかし死せる平等はあり得ないし、又、あつてはならない。種々なる多様性は、社会的生活の豊富な内容の一部分である。ただしそのような多様性が生み出す結果は、それを他人のために使用すべきものであると、人が知っている限りにおいてのことである。私どもの一人一人は、自分に与えられたものの保管人である。しかしこのように与えられたものは利己的蓄積のためでなくして、奉仕の機会をつくるために与えら

れているのである。そして、この管理をまかされているという考え方が、社会事業家にとって、最上の金言である。人類に対する敬虔なる愛は、常に自發的方法を用いるものである。個人は神聖である。物質界全体は、個人の生命と比較すれば、取るに足らぬものである。社会は神聖である。神が父であることが、すべての生命の土台である。同じ共通の父なしには、如何な兄弟愛も成り立ち得ない。一つの家族の中で、敬虔な愛は團結のきずなである。マツチニは多くの賢明なことを述べている。「人は各自がその欲するところに従つて」と教えられてはならぬし、勿論、「各自がその激情の赴くがままに」と教えられてもならない、寧ろ「各自がその愛するところに従つて」と教えられねばならぬと主張したが、彼は正しかった。かつては、山々や大洋などが世界の他の地域にいる同胞と接觸することをさまたげたが、そのような地理的障害はなくなった。今日では、世界は誠に小さな場所であつて、こういう変化のすべては、私どもの一人一人に大きく挑戦して来る。何故ならば、人生は以前よりは遙かに複雑となつて、益々、困難な諸問題に直面するようになって来た。変化は常に人生の不変の法則であつた。そして私どもは激動してやまぬ現代に住んでいる以上、立ちどまることは、個人にとつても、社会にとつても、民族にとつても、又、国家にとつても、大いなる破滅を齎すに違ひない。こういうことすべては、しばし立ちどまつて、私どもには如何な貢獻をなし得るかにつき、考えることを意味する。何故ならば、新しい目的に向うために新しい手段を用いることによって始めて、時代と共に働くことが出来るからである。私自身は、以前にもまして今日、人類への奉仕

の必要があること、その奉仕の範囲を広げる必要があること、世界の必要の水平線が断えず広がって行くことに対応し得るよう、私どもの視野を広げる必要があることを少しも疑わない。若し世界の偉大な諸宗教の創始者達の生活や彼らの説教したことが生き残るためにその生命を捧げた使徒達や殉教者達の生活、或は如何な形であっても、又如何な風土であっても、悪を見出せばそれと戦った社会改革者達の生活などによって、世界歴史の頁が金文字で色どられなかったならば、それは極めて面白くないものになったであろう。若しガリレオやレオナルド・ダ・ビンチやダンテやルッソーやマッチニやウィルバーフォースやリビンダストーンやアシシのブランシスやジョセフィン・バトラーやフローレンス・ナイチンゲールやアブラハム・リンカーンやトルストイやルネー・サンの如き男女、その他、枚挙するには余りに数多い地上の偉人達が生きていなかったら、この世界はもっとつまらないものになっていたであろう。不純潔、奴隷、無智に反対する叫びは靈感を受けた男女によって常に、発せられ、そしてそれが一般に認められるようになるのは、彼らがその大目的のために喜んで奉仕し、又、犠牲をいとわぬためである。法律の制定はもの見方が変わって来たことを認めても、一般の輿論に先だって進むことは出来ない。此処で社会事業家が大いに活動して、法律制定の時が熟するまで、一般の輿論を喚起し、又、深め、或は任意の方法によって社会的良心を覚醒させるべきである。しかも、社会的良心は到る処で覚醒されねばならない。若しすべての人が人類共通の善のために献身的に働くならば、即ち若し私どもが自分自身の如くに隣人を愛するならば、資本家と労働者と

の間に、又、様々な様式の政府と政府との間に、争いというものはないであろう。公民とか愛国心とかの概念は新しい姿をとり、この利他主義の精神は国家的、国際的生活をつくりあげる、あらゆる種類の組織や制度に自然に広って行くであろう。ラメネエは「犠牲以外にはよい結果を齎すものはない」といった。従って、私どもの個人活動の分野はたとえ小さく、又、限られていようと、私どもの利他的な働きは少しずつ、心の暖かさと光の喜びを、段々に広い範囲に及ぼして行くであろう。そして現代において、私どもは皆、ガンデイやアベ・ビエル、ヘレン・ケラーやアルバート・シュヴァイツァーなど、人類への理想的奉仕者達の故に、靈感を受けているではなからうか。こういう人々は悉く、人類同胞に奉仕する衝動が善き生活の基調であり、又、基調であり続けるということ、そしてそのような奉仕を通してのみ、人は自分の人格を十分に延ばすことが出来ることを証明した——若し証明が必要とあるならば。

私どもは今も尚、闘争の影でおほいかくされた世界に住んでいる。二つの悲惨な大戦は、人類に次ぎのことを教えた、或は教えた筈である。これは即ち戦争は如何な紛争に対しても解決にはならぬこと、事実、戦争は問題を益々、大きくするばかりであるということである。それなのに、どの国家も今尚、平和を守るために武器に頼らねばならぬ。全く言葉の矛盾である。今日、実際に武器による戦争がないとすれば、核戦争は世界の破滅を齎すことを誰もが知っているからに過ぎない。換言すれば、憎しみにまで高まっている猜疑心と不信の念が人々の心の中に一杯になっているが、戦争に至らないのは、ただ戦争恐



怖の故に食いとめてに過ぎない。国際社会事業会議の如き団体が、何とかして、国際緊張を緩和することに貢献出来ないであらうか。私は出来ると思ふ。恐怖にみちた世界の中にいる社会事業家として、私心なき奉仕により、すべての国民の間に新しい関係をつくることに助力をおしまぬことは、私どもの特権である。

私どもは今日、誰でも病氣、無智、貧困から、ある程度の自由を当然、期待出来ることを知っている。十年前に、私どもの中の誰かが想像したよりは恐らくもっと早く、アジアとアフリカの人々には、外国支配からの自由が新しく勝ち得られたし、政治的独立が実現され、現に、実現されつつあることを知っている。このような人々のために、何が出来るであらうか。彼らの窮乏はわめきたてている。平和が保たれんためには、彼らの窮乏は除かれねばならぬ。満足がない時、空腹や病氣や貧困が国中にひろがる時、戦争が起るからである。従って、アイゼンハワー前大統領が、賜を持っている人は、持っていない人とそれを分たねばならぬといったのは正しい。そして軍備のために巨大な費用を費すことをやめ、そのような巨額の金が世界の不幸と苦難を少なくするよう、転用するべきだと人々が主張するのは、全く当を得たことである。

あなた方、西半球に住む人々は貧困や病氣、無智がこれらの大陸には、信じられない程に存在していると、いっても容易に想像し得ないであろう。教育上の事柄や専門的訓練を受けた人々、社会的娯楽の問題に関しては、印度はアジアやアフリカの他の国により、多分、遙かに進んでいる。しかし私どもの直面する問題は最もたくましい心を持

った人をも驚かせるであらう。何百万の子供達は学校に行っていない。全国民の二十五パーセントまでも、読み書きが出来ない。何百万の人々は食物を十分、持たない。若し彼らが事実上、空腹を感じないとしても、カロリーの取り方は健康な身体をつくるに必要な最低限度よりずっと下まわっている。一人当りの収入は年に僅か二九四ルピー、即ち六十弗である。私どもが政治的に独立してから最初の十二年の間は、たしかに収入は上った。しかしそれは生活費の増大と歩調を合せていない。政治的に独立して以後の最初の十年間に、千人の子供が生れたのに対して、幼児死亡数は一六〇人から九二人に減じ、母の死亡数は二十人から十二人に、そして母の疾病数は三〇〇人から一五〇人に減じた。しかしこういう率は悲惨にもまだまだ高い。一才から四才までの間の死亡率は、欧洲や米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドにおいてよりも四十倍から六十倍は高い。人口六千人の苦しみに応じる医者是一人、一万三千人の求めに応じる看護婦は一人、そして十六万人に対して一人の保健婦があたっている。これらの数は、人口に対して訓練された人々の比率によったものである。しかし印度人の八十パーセントは村落に住んでおり、医者や看護婦の大多数は都市に住んでいて、一般大衆が利用出来る医者の助手や代診は印度人の必要と少しもつり合っていない。全国で、病院には未だ、十八万五千のベッドしかない。そしてその中に出産用として二万二千、子供用には四千のベッドが含まれてのことである。癩病は重大問題である。今より更に多くの働き手とより多くの財政的援助がなくては、何時、印度からこの恐ろしい病氣を除き得るかわからない。肺結核で、多数の死者



を依然として出している。そしてこの病気をひろがらせるすべての条件が揃っている。それは栄養失調、栄養不足、人口超過、その他伝染病患者を隔離する病床や他の設備の不足などである。一九四七年に、五千ベッドであったのを三万三千ベッドにその数を増したが、それ以来、一年間に肺結核で五十万の人が死に、五百万の人がはつきりした結核患者である以上、当然、持つべきものに殆ど達していないことがわかるであろう。印度には又、二百万以上の盲人がいる。そして悲劇的なことには、子供や青年の盲目の九十パーセントは、困窮している人々に助けの手を差し出す手段さえ持っていれば、これを防げる場合である。更に又、身体的に精神的に不具な人々がいるが、これらの人々に対して、今までのところ殆んど何もなされていない。地方に住む人口の八十パーセントが安全な給水組織を持っていないということは悲しむべきことだが、事実である。そして飲料水の媒介による病気によって、如何な荒廃が齎されるかは、容易に理解されるところである。環境衛生と下水設備とが一般に欠けていること、又、多くの地方ではそれが全くないために、印度の農村における生活状態が不健康の必然的原因となっている。マラリヤ蚊を征伐したので、この致命的な病気によってひき起される死と衰弱とは非常に減じた。そしてこの疫病を地球上から追い払うためのW・H・Oのプログラムが、その目的を完徹する日を待ち望んでいる。その他、昆虫が媒介する病気や他の慢性病があるが、これの一つ一つ挙げている時間がない。しかし一九五〇年に不健康な不具や若死のために、四百億弗以上を印度は費したとあなただけに話せば、私どもの健康問題の膨大さについて、幾分、頭に描

くことが出来るであろう。若しこれが印度におけるありのままの事情であるならば、同じことは、否、恐らく更にもっと悪い事情が極く最近、独立したアジアやアフリカの他の貧しい国々において、そして特に民主主義的仕方で国をつくろうと努力している国々において、広く見られるであろう。この事は私どものすべてに、そして教育があらゆる子供に行き渡り、健康の注意がすべての人に与えられ、病気は大部分、克服され、身体障害者の生活が生き甲斐あるものとされ、老年はもはや恐れるに足りないというような国々から来た人々には、特別の程度で、何という挑戦を促して来るであろう。

私どもが属する国々の必要をよく知っており、世界の窮乏を十分、知っているとはいえ、今日の社会事業家が直面する難問題とは如何なものであろうか。私の経験はこう告げる。即ち第一には、政府によってなされる社会奉仕は、それが当然、受けるべき注意も物質的援助も受けていない。このような現象は私の国だけでいつも見られることではないといっても、私は正しいと思う。私どもは科学時代に生きているといったが、しかし同時に又、私どもの時代では、人生の物質的価値が一層、強調されるということも等しく正しい。国家の繁栄を全く経済的基盤にたって判断する傾向がある。換言すれば、個人の所得がどれ位あり、産業上の生産目標がどの程度に達しているかということと判断する傾向が強い。私どもの最大の弊害が人口過剰である時に、国民の健康を増進しようとするのは何故かと屢々、聞かれる。そして又、等しく屢々、ある人々は全般的に見て、教育は専ら人々を不満にするのを助長すると、主張する。そういう無智な人々は、次ぎのことを殆

んど認識しない。即ち聡明な協力は理解力を十分、養った人々から始めて出て来ること、同様に熟練工は常に、よりよい結果をあげることが認識しない。しかし又、栄養不良者や貧弱な家に住む者からは、如何な価値ある生産品をも期待出来ないし、病氣の子供には如何な教育も授けられないことを忘れてはならぬ。従って、此処で開かれるような会議においては、一般の輿論を喚起して、各国の政府に十分、圧力を加え、政府がする社会奉仕を、その他の発展計画と平等の平面におくようにしなければならぬ。

私は又、もう一つの問題に、此処に集っている代表者達の注意を引かねばならぬ。今日はすべての或は大部分の民主主義的国々は「福祉国家」について、声明する。国家が総力をあげてその国民の福祉を増進することは必然の義務であるが、若しその国家があらゆる慈悲深い活動を監督する権利を自分の仕事の範囲だと主張しないならば、福祉国家の解釈は余りにも狭すぎる恐れがあると思う。国家は決してその機構を活気づかせ、必要や窮乏についての人間的側面を取り上げるようにすることは出来ない。そういう機構は、その本性からして、魂のぬけたあらゆる官僚式繁雑さを特徴とし、その当然の結果として生ずる遅延で、もっと人々をなやます。それ故に、任意活動がどの国家でも、又、世界中の、向上のために十分な役割を演ずるには、そのようなことは任意的努力を侵害することになるから、これを食い止めねばならぬ。

社会奉仕もまた、云わば一つの学問になって来た。そして人類のために仕奉りたいと願う人々にとって、無報酬で働くことは決して容易

なことではなくなった。有給の働き手は、自分を雇う人の権威によって、定められた条件を守らねばならぬ。そして若しその権威者が政府であるならば、その条件もまた専断的なものになり易く、最高の意味で社会奉仕の概念が基礎づけられている人間の人格の、無限の価値に注意を向けることを許さない。国家は自身自身が規則や条例によって縛られているので、当然、同じことをその軌道内で奉仕するすべての人々に押しつける。政府の働き人達は、任意的試みがその仕事に持ち込む宣教師の熱心さも理解も、持ち合せない。全体主義的国家は多分、その国民のために、民主主義の国家よりはより多くのことをするであろうし、又、確かにもっと迅速にする。しかし前者においては、国家が国民のために存在しているというよりも、寧ろ国民が国家のために存在しているという、悲しむべき光景がある。それならば、今、私どもが置かれているような状態で、事情上己むなくどうすることも出来ぬような制限が私どもの上に置かれているにもかかわらず、どのようにして役目を果し終えられるだろうか。国家も社会事業家も、人生のあらゆる分野で活動するよう企て得ない限り、両者が協力するとなると、互いに独立を保ちつつ、活動することが可能でなくてはならない。私どもは金も必要であるが、働き人も必要である。国際連合には専門的部門があって、すべての加盟国の社会事業家達の要求に応じるようにつくられている。W・H・Oについて述べると、その開始以来ずっと、それと共に、又、そのために働く光栄を私は持って来たが、アジアやアフリカでU・N・I・C・E・Fと同様、この機関によって、なし遂げられた優秀な仕事を立証することが出来る。しかしそれらの

仕事を補足する余地は十分ある。国際赤十字社委員会と赤十字社連盟は奉仕のすばらしい記録を持っており、国際連盟が前面に出て来るずっと以前から、一世紀にわたってこの分野で活動し続けている。ところが今は資金欠乏のために困っている状態であるが、なお、仕事をやるよう、要求されていることを知ると、心痛む思いがする。国連からその専門部門が資金を受けているように、赤十字社がこの国際会議と同様、国連から資金を受け、有用な奉仕が任意的機関によって、今日、援助を求めている国々になされるようになることを見たいものである。しかし此処でもまた、一般の輿論がまとめられる必要がある。そして財政的援助を任意活動の機関に与える人々は、どんなひももその活動機関につけてはならない。ガンディが政治的独立は、彼の夢見ている印度を築き上げるための第一歩に過ぎないといったのは、全く正しい。そして自由のための戦いを彼が指導していた間、終始、彼はあらゆる分野での組織化された社会奉仕を意味する、建設的プログラムと彼が名づけたものを、最も重要視した。この事業に従事した人々は、政治に没頭しなかった。そして彼が如何に正しかったかは、私自身の経験によって十分、確認されている。政党政治が勢力を持って来るや否や、人間の福祉は直ちに政治的方便に従属するようになる。社会奉仕に従事する国際機関のために、財政的援助を得ようと努力するよう、推薦するが、しかし決して任意的試みが政府の援助のみで、職分を果すことを願う者ではない。究極においては、国民の寄附と奉仕する私たち自身の内的衝動に頼らねばならぬ。勿論、福祉国家においても、社会奉仕者達が政府当局からの財政的援助に全然、且つ喜んで依

存し、自分の努力で募金しようとしなくなる危険がある。他方、生活費が高くなり、又、殆んどすべての国の個人が今日、まぬがれない高率の税金の故に、十年前にしなければならぬように、善い目的のために多額の募金することは殆んど不可能となった。与えたいと願う意欲が減じたわけではないが、慈善行意はその上におかれた制限によって、否応なしに、抑制されてしまう。それ故に、社会奉仕の機関は、それが属する地方の内部で、寄附に対する免税処置を講じなくてはならぬ。そして又、世界の窮乏が除かれんためには、同じような便宜があらゆる国際的団体に対して与えられるより、努力せねばならぬ。

アフリカには動乱がある。アフリカ全大陸はながい眠りから覚めて、束縛から解放されんことを求めている。政治的自由がアフリカ人に与えられつつあると知るとは、愉快なことである。しかし単なる政治的自由が、この大きい世界のいろいろな地域が直面している多くの問題の解決とはならない。社会事業家の真の大群が、国際連合がこれまでに、たとえばコンゴでなし得たよりもっと多くのことを、人々のためになし遂げることを信じて疑わない。W・H・Oや赤十字社の職員はそこで立派な奉仕をし、彼らの人道主義的接触のみで、人々の信頼を勝ち得た。私自身はアフリカの人々が自分達の目的達成のために、暴力に訴えるのをやめんことを、心から祈るものである。何故ならば、如何な永久的善もそういう仕方では得られる筈はないからである。若し人種的偏見が克服されるべきであるならば、それは無我の奉仕によってのみなされ得るのである。若し国と国とを分つ緊張が緩和されねばならぬなら、唯一の目的が人間の福祉であるような、そのよ

うな分野において、全世界が協力することによって、それを最もよく果すことが出来る。丁度医者が自分の患者を、その患者の国籍や政治綱領の如何にかかわらず世話をするように、社会奉仕者も同じように、人類に奉仕しなければならない。アジアやアフリカはそのような奉仕者を必要としている。その仕事の範囲は際限なく広がっているが、働き人は全く少数しかない。教師、医者、看護婦、物理療法者、身体障害者や老人の世話をする技術を持った人、運動家、宣教師の熱心さで、困難を喜んで耐え忍ぶ人々などが、単に働き人を訓練するためばかりでなく、僻地でその地域の人々とともに、又、その人々のために働くのに必要である。そういう働き人によってなされる仕事は、決して容易なものではない。それには勇氣と忍耐と、人類に対する溢れるばかりの信仰と愛とが必要である。しかしそういう奉仕は私どもの心から憎しみを取り除き、恵まれない同胞の間に、好意と励ましを注ぎ、闇のあるところには光を照らし、人種や信条、皮膚の色に対する偏見という、人間のつくった障壁をつき破り、無智から来る狭量を一掃し、人類全体に対する愛と正義との種子をまき、それによって人類は戦争なき世界という収穫をかり取るようになるだろう。又そういう奉仕は言語や伝統、政治組織を異にする人々が根本において一つであると感じて、気候や人種の多様性にもかかわらず、共通の人道というきずなによって結び合わされる、雰囲気をつくるのに貢献することが出来るのである。

ガンディはいつている。「私の目的は世界と友達になることである。そして人間に対する最大の愛を悪への最大の反抗に結びつける」と。

私はこの偉人と一緒に暮す特権を与えられている間に、次のことを学んだ。即ち人生の栄光は愛することであって、愛されることではない。与えることであって、与えられることではない。奉仕することであって、奉仕されることでない。危急の時、他人に対して、闇の中で強い手となること、無力の危機の中にある如何なる魂に対しても、力づけの杯となることだということを学んだ。自由は人生の生き方として、非常な努力と心からの犠牲を通して勝つことが出来る。私どもすべてがその生涯を再び捧げねばならぬのは、貧困、飢餓、病気の束縛から自由を得るためであり、人間精神の自由のためである。私ども、一人一人がそうするための勇氣と智慧と愛と信仰とを豊かに与えられること——これが私の心からの希望であり、祈りである。